

## 〈大都市〉について、ネグリへのコメント

ウーゴ・ロッシ\*

(北川眞也\*\* 訳)

Ugo ROSSI

Commento a Negri sulla metropoli

<http://www.euronomade.info/?p=2675>, Giu 21, 2014

私は、「社会的協働のコミュニティ」というネグリへの興味深いインタビューに対して、三つの論点を提示してみたい。

1. 資本主義と都市／大都市。ネグリは都市／大都市の役割を、そこから認知労働が生産される容器へと、そしてマルチチュードとコモン<sup>1</sup>の形態で、集団的に姿をあらわす認知労働者階級 *cognitariato* へと切り縮めているように思える。これは受け入れられることではあるが、歴史のほんの一部のことにしか言及していない。

実際のところ、現代資本主義は、ネグリによって考えられるそれよりもずっと「多種多様な」生産形態である。つまりそこにおいては、資本蓄積の多様な論理が共存しているのである。西洋の資本主義的諸都市、さらには発展しつつある経済諸都市においては、資本主義の多様な形態と様式が同居している。それは第四次産業と認知労働から、不動産部門やより活発で革新的なマニュファクチュア、インフォーマル部門にまで及んでいるのだ。後者は特にグローバル・サウスにおいて、さらには地中海地域の国々（このあいだの [2013年] 12月にトリノでなされた抵抗運動のなかで、露天商が果たした役割をみよ<sup>2</sup>）においてもまた、非常に重要なものである。

資本主義的蓄積の空間として都市を唯物論的に分析することは、その内部で同居する資本主義の多様性を考慮に入れることを意味するのだ。

2. 都市／大都市と不動産部門。ネグリは、ハーヴェイと他の伝統的なマルクス主義者たちによって、不動産部門の役割、つまり、現代の金融化された資本主義の鍵となる部門としてのその役割が、過度に強調されていると考えている。この批判は、ある部分においては受け入れられる。

けれども、アメリカ経済には、以下のような長期的傾向があることに疑念の余地はないだろう。それは、不動産部門が、アメリカの国民経済を引っ張る「反循環的」部門として用いられていることである。世界経済におけるアメリカの指導的役割を考えると、こうも言えよう。不動産部門は結果的に、グローバル経済をも引っ張る「反循環的」部門として、アメリカ経済に用いられているのだ。

さらに言うなら、たとえばブラジルやサンフランシスコのような非常に様々な場所においてなされる、ジェントリフィケーションと生活コストの増大に抗う数々の闘争は、都市での価値実現がどれほどまでに考慮されるべき抗争性の領域であるのかを示しているのだ。

3. 「都市への諸権利」対「コモン」。ネグリはこう考えている。都市への諸権利は、フォード主義-ケインズ主義時代と結びついたものであるから、この主題は乗り越えられていると。さらにネグリによるなら、こんにちにおいては、社会的再生産に必要な集合的サービス（交通とモビリティ、低所得者用住宅など）へのアクセスを要求するコモンという主題、都市への諸権利と比して、何かしら脱領土化されたやり方で、コモンという主題が提出されねばならないのである。

こうしたテーゼは、都市研究者・マルクス主義地理学者のアンディ・メリフィールドによって擁護されたそれ (Crowd politics, or 'here comes everybuddy''), *New Left Review*, n. 71, 2011) と何かしら類似性を有するものである。メリフィールドは、ネグリによって提出されている資本主義の読解から出発するわけではないが、よく似た結論に達している。簡単に言えば、メリフィールドはこう考えている。都市への権利というルフェーヴルの観念は、こんにち都市に

\* トリノ大学

\*\* 三重大学

結集している人びとにとって、地区のスケール（たとえばゲジ公園）で活動する人びとにとっては、あまりにも広大であると同時に抽象的であると。あるいは、都市よりもさらに大きなスケールで（たとえばアラブの叛乱）物事を考察する人びとにとってはあまりにも狭すぎるのだと。

それはまたこんにちの都市が、ルフェーヴルによっても無効だとみなされていた都市-農村の二項対立を消滅させるほどまでに、あまねく浸透的な要素となってきたからでもある（メリフィールドとニール・ブレナーのような人たちは、「プラネタリー・アーバンゼーション」というカテゴリーを用いている。それは、国連などの「都市の時代」にかんする諸テーゼのように、都市を拡大させる人口学的現象を示すためばかりではない。都市の文化的ヘゲモニー、つまり、グローバルな流通を資本主義的に発展させる政治を練りあげる場所としての都市がもつ文化的ヘゲモニーを指摘するためでもある）。

メリフィールドは、以下のように主張する。都市は、都市への権利の要求がなされる領域としてよりも、多様な主体性のあいだの「出会いの政治」がなされる選択的空間として理解されるべきだと。このテーゼは、ネグリのそれのように、注目に値するものではある。私はしかしながら、両者のこの見解は還元的であると考える。エンジン・イシンのようなグローバル都市の研究者は、様々な社会集団とマイノリティ（女性、同性愛者、エスニック・マイノリティと移民、路上生活者と失業者、様々な類のサバルタンなど）によって提出されている都市への諸権利（複数形で）のための諸闘争の現代性を示してきた。イシンによれば、グローバル都市とは、都市のシティズンシップの実践をたえず再創造する「差異の機械」なのである（E. Isin (2002) *Being political. Genealogies of citizenship*）。

私からすると、これは「コモンという観念」と矛盾するものではない。もしコモンの主題が「差異の機械」を重んずる視点から提出されるとしたら、それは矛盾するものではないだろう。別様に言うならば、コモンは、都市への諸権利（のための諸闘争）の「アサンブラージュ」として理解できるのではないか？ このように理解するためには、私たちは資本主義の一枚岩的なビジョンから解放され（論点1を参照）、資本主義を多様な実体として理解しなければならない。またそれゆえに、資本主義によって生みだされる諸闘争もまた差異化されており、それとして「代弁=表象することのできない」もの、一なるもの *unum*（マルチチュード）へと還元することはでき

ないのである。したがって、政治的な（コモンの）観点からみて、（ポスト）オペライズモ「学派」によってなされているような「再構成 *ricomposizione*」<sup>訳注2</sup>ではなく、「アサンブラージュ *assemblaggio*」の用語において議論がなされる必要があるだろう。

2014年5月

## 訳注

訳注1 2013年12月にトリノでは、都市交通をブロックする商店主、職人、露天商、さらには学生などによる数々のデモ行進がなされた。これは「イタリアを止めよう！」をスローガンとして、イタリア全土に広がるフォルコーニ運動の展開でもある。フォルコーニ運動は、緊縮政策に反対して、2012年にシチリアの農民や羊飼、トラック運転手らによってはじめられた。この運動については、以下で言及されている。ジジ・ロジューロ、廣瀬 純『資本の専制、奴隷の叛逆』補遺、ジジ・ロジューロへのインタビュー2』2016、<http://www.koshisha.co.jp/blog/archives/446>

訳注2 再構成 *ricomposizione* とは、オペライズモの階級構成 *composizione di classe* という概念において鍵をなすものであるが、それについてはジジ・ロジューロの以下の説明がクリアである。少し長いが引用しておく。「階級構成」概念は「資本の有機的構成」というマルクスの概念を参照したものだ。マルクスにおいて問題となっていたのは固定資本と変動資本とのあいだの関係だったが、「階級構成」概念はこのマルクスの概念を主観化するものだったと言える。オペライズモが問題にした関係は階級の「技術的構成」と「政治的構成」とのあいだのそれだった。図式的に言えば、階級の技術的構成とは、資本による労働力の節合、労働者と機械との関係のことであり、政治的構成とは、傾向的に自律的な政治主体としての労働者の自己形成のことだ。技術的構成と政治的構成とに加えてアルクァーティは「再構成」という第三の要素を重視した。「再構成」というのは、資本による労働力の節合のその切断のことであり、新たな自律の主体の形成のことだ。再構成は、すでにあった状態に戻ること、資本によって破壊された階級のその「本来の姿」に戻るといったことではなく、生成状態にある力能が一とつのかたちをなすということだ。階級の政治的構成は、敵対的革命主体としてではなく、むしろ、たんに、階級の政治的表現として、どんな方向にも進み得る両義性を孕んだものとして理解すべきだ。オペライズモは、疎外なき原初状態に戻ろうと呼びかけるヒューマニズムでも、「労働者

としての労働者」といったものへの盲信でもなかった。オペライスタたちは「大衆労働者」（テイラーシステムの生産ラインにおいて労働に従事する労働者）と彼らの呼ぶ特定の階級構成を同定した上で、たんに資本に抗するだけでなくおのれ自身にも抗する新たな主体の構築のその可能性を問題にしたのだ。ジジ・ロジエーロ、廣瀬 純『『資本の専制、奴隷の叛逆』補遺、ジジ・ロジエーロへのインタビュー1』2016, <http://www.koshisha.co.jp/blog/archives/442>